

アマカゲラと鬼門

受付の若娘はため息をついた。もうじきあの男が訪れる時間らしい。ここにはいつも決まった時刻になると、一人の厄介な男が現れる。その男というのは、扉の向こうに現れたかと思うと、もの凄い剣幕で、この若娘に中へ入れろと、その遠い透明な扉の向こうから叫ぶのである。その姿はまるで、我を忘れているかのようであつた。しかし、この男はまだ、この場へ入る

ことを許されていなかっただけである。だから、この若娘はいつも丁寧に説明し、説得を試みるのだが、男は彼女の言葉に聞く耳をもたず、毎日、扉の向こうに現れては、ひたすら叫び狂うのであつた。若娘はすっかり参つてしまつていた。とりわけ今日は来客が多く、従業員は皆、対応に追われている。こんな時に男が現れては仕事にならないかもしれない。この若娘もまだ新人で、仕事の要領を掴めずにいた。若娘はどうしたものかと、憂鬱な面持ちで男が現れるのを待つていたのである。しかし、意外なことに今日は、時間になつても男は現れなかつた。若娘は不思議に思い、どうし

て今日は現れないのかと人に尋ねてみるも皆、口を揃えて分らないというばかりであつた。

結局この日、男はこの場に現れることはなく、若娘も仕事を切り上げた。帰り際の若娘は、いささか晴れやかな表情を浮かべて去つていつたのである。宙に浮いた立方時計、九本の秒針がゼロを差した。

例の男はある門の前にいた。その門には「鬼門」という文字が表面に大きく刻まれている。鬼門には門の素材が焦げたような、何色かも判別がつかない外見で

全体を覆っているように男には見えた。その高さは百メートル近くはあるだろうか。さらに男の行手を阻むように、門の左右に永遠と伸びる城壁がある。その長さは、暗闇の向こうにその姿が吸い込まれているほどであった。男はただ無表情でその鬼門を見つめていた。ここがどこか男にも分からない。どのようここにここに辿り着いたのか。何故、門がここにあるのか、何故自分はここにいるのか、男には検討もつかなかった。だが、この男はそうした自身の成り行きを、平然と受け入れていたのである。そこにはただ、男と鬼門との距離があるだけ、何らかの差があるのみで、他に周り

には何か存在するのか、しないのか、それすらも男には不明であつた。この鬼門は誰が造つたのであろうか。いつ建てられたのだらうか。恐怖を煽るほどの禍々しい巨大な鬼門は、それでいても闇の中に存在を潜めるように、ひっそりと寂しい有り様であつた。そして鬼門には人が一人、入れるかどうかほどの隙間がある。まるで男を内部へ招き入れようと言つたように。男はなおも無表情のまま、その隙間の先にある暗闇を見つめていた。

「小僧、そこで何をしている。」

そのとき、声色の重い男の声が遠くより響いた。気がつくとも門の奥に薄っすらと人影が見える。一人の老夫である。こちらに半身の背中を見せて門にもたれかかっている。薄暗いためにあまりはつきりと姿は見えなかつたが、羽織を着て、下にはもんぺを穿いているのである。色は不明だが、衣服の所々に虫にかじられたような穴があるのが確認できた。また、腰のあたりまで伸び切った髪は全く整っておらず、複雑にねじれた灰色の乾いた髪が老夫の性分を思わせる。老夫は背中を男に向けたまま口を開いた。

「ああ、お前も鬼門が見えるのか。」

しやがれた声で嘲笑うように言った。男が無言で黙っている、老夫は懐から葉巻を取り出すと男に投げつけた。男は戸惑いながらもそれを手に取った。

「俺の嗜好だが、味は保証する。これでも一応、街で流行らせたくらいだからなあ。」

老夫はそう言つて、葉巻に火をつけ天を仰いだ。男も黙つて鬼門の前へ向かい門に背中をつけると、地面に顔を落として、葉巻を吸い始めた。二人の男は鬼門を挟んで互いの背中を向けながら、流れる煙の行き先を虚な瞳で追いかけていた。

「ああ：人と話すのはいつ以来だろうなあ。」

老夫は心なしか嬉しそうに呟いた。

男が話を聞くと老夫は葉巻製造に携わっていたようだ。父親の影響で葉巻に興味を抱き、青い少年時代から、好き好んで父親を真似るように吸っていたそうだった。後々、自分で起業してから、老夫の葉巻は地元の街で有名になったという。ただ、老夫は流行らせたとは豪語していたが、その葉巻は男には聞き覚えのない種類だった。しかも、依存性のある葉巻であれば、人は簡単に浸るものである。それにもかかわらず、この老夫は、人々を救ったというばかりに男に自慢してくるのである。男はこの老夫の有り様を黙って傍観してい

た。その話の筋からしても、老夫の言葉はどこか現実味に欠ける箇所もあり、話題はどれも仕事のことばかりで面白みがなかった。男は途中からほとんどの話を聞き流していた。しまいには話を切り上げて、音楽でも聴こうかとポツケのイヤホンを取り出そうとした。

ただ、男には気になることがあった。この老夫は家庭の話題になるとあからさまに避けようとする。その様子には好奇心が向いたのだが、何か事情があるのだろうと、しつこく詮索することはしなかった。ただ、老夫は父を戦時中に亡くしたことを男に打ち明けた。

きつと家庭内の確執でもあるのだろう。男はそう解釈

した。この老夫の話がどこまでが真実なのかは確かめようはない。男は未だ半信半疑であつた。この老夫の話についても、存在についても。しかし、ここでは真偽を問うことは意味をなさない。この空間はそう告げるように、老夫に会話の流れが入つた。

「どうだ。俺のは、うめえだろう。」

相変わらず老夫は、調子が良さそうに言つた。男は一息吐いてから、

「特別うまいってことはない。」

男は淡白に吐き捨てた。

「生意気な餓鬼だな。」

男のそつけない返事に、老夫は不満げだったが、すぐに考えが至つたというように微笑んだ。

「まあ、そう、時代の壁つてやつだな。小僧にはこれは古すぎて口に合わないかも知れねえなあ。この鬼門が示してやがる。悲しいぜ。」

「関係ねえよ……。」

老夫が感傷に浸っている中で、男が問いかけた。

「あんたはどうしてここにいる？」

「さあな。好きでいると思うか？こんな何もねえ場所によ。小僧に会うまで何の刺激もなかつたよ。久々に

体が息づいてなあ。まあ、どうしてここににいるのか、俺が聞きたいくらいだが。」

「じゃあ、いつから？」

「ずっと、だな。時間の感覚なんかが残らねえくらい長いこといる。俺は、ずっとここで考えているよ。時間だけは有り余ってそうだからな。」

無音の空間に老夫が肌をかき回す音だけが響く。

「俺もずっとここに居なきやいけないのか？」

「そんなこと俺に聞いてどうする？まあ、お前がそう思うなら、そうなのかも知れねえなあ。」

「なんだよそれ……。」

老夫の気の抜けた返答に男は少し苛立ちを覚えたものの、老夫の言わんとすることが何となく分かるような気もした。男は改めて質問した。

「なあ、あんた人、殺したことあるか？」

「なんだ小僧、お前、人殺したのか？」

「ああ……」

老夫は意外にも冷静であつた。

「あるよ。そりやあ、もう、散々殺したよ。」

男の声色はしやがれているからか怒りを含んでいるように感じられた。それから二人の会話は途切れてしまった。老夫はまた、新しい葉巻に火をつけた。

「お前は？女か、子供か、それとも村の一つでも焼き
払ったか？」

「自分だ……」

男は消えそうな声で答えた。

「そうか……」

老夫は鼻で笑った。

「時代が変わっても、変わらねえこともあるもんだ
な。それで、楽になれたのか？」

「なつたと言えはなつてるし、なつてないと言えは
なつてない。」

「煮え切らねえな。」

「あんたも同じだろ？」

男は投げつけるように言った。

「さすがだな。若い奴は鋭いぜ。」

老夫は愉快そうに笑いながら言った。男はそれが感に触ったようで、持っていた葉巻を老夫の方に投げ捨てた。老夫は諭すように言った。

「分かるよ、小僧。」

「知ったような口聞くなよ！」

男は今までとは打って変わって強い口調で言った。

「いや、分かる。じやなきや、俺と小僧はこんなところで出会わねえさあ……。」

は黙っている。

「もうここは俺だけの世界だ。他に人っ子一人いやしねえ。初めてここに来た時には、鬼の一匹でも居るかと思つたがそれでもねえ。この鬼門だつて、小僧が来るまではなかつたんだ……。」

「あんなだけの世界……。」

「ああ……。少なくとも、こつち側はな……。」

男は、少し考えるような素振りを見せ、鬼門のことに
ついて老夫に尋ねた。

「あんた最初に、鬼門が見えるのか、と俺に聞いたな？」

「ああ。」

「逆に聞くが、こんな巨大な門が見えない奴なんているのか？」

「巨大？」

老夫はかなり驚いた様子で聞き返したが、すぐにかぶり振った。男は毅然と主張した。

「よく見ろよ。高さだけでも百メートル近くはある。」

男が座つたまま、腕を突き上げる。老夫はしばらく返答しなかつた。男がそれを不思議に思っていると、

「お前にはそう見えるのか……。」

老夫はそうボソツと呟いて、何かを探るように下を向いた。

「どうということだ？」

男が、疑問を投げかけると、老夫は葉巻を眺めながら、どこか遠くを見つめていた。

「小僧、お前にはそこの門の隙間はどのくらい開いて見える？」

「どのくらい？人が半身、見えるくらいかな。」

「そうか……。実はな、その隙間、俺にはこの葉巻の箱がなんとか入るくらいにしか見えねえんだ。だから、小僧の姿もほとんど見えちゃいねえ。」

「はあ？そんなことがあるかよ。」

男は笑って言った。男から見ればこの鬼門は明らかに巨大であるし、門の隙間も一人が通れる広さは確かにある。だが老夫は釈然としない。

「あるのかも知れないし、ないのかも知れない。ただ俺には、この鬼門は十メートルくらいにしか見ええない。まあ、俺が間違っているのかも知れねえがな。」

男は納得しなかつた。男は一貫して老夫のことを疑つていた。いつも老夫の話はどこか大げさで、言い繕いがあると思つていたからである。

しかし、である。それから老夫の声色は急に弱々しくなつた。先ほどまであれほど尊大な振る舞いを見せていたために、男はいささか怪しく思つた。老夫は何か小さな声でブツブツ呟いてから、安堵したようにこう語つた。

「なあ、兄ちゃん。俺は長いこと、ここで一人で好き勝手に過ごしてきたが、こんなこともあり得るなら、これも悪い気はしねえなあ。ああ：鬼門か：。」

どういふことか男は疑問を投げかけたかったが、何かを察したように少しの間、沈黙を守っていた。老夫は泣いていた。怯えるように、嘆くように、安心したように、声を漏らしている。彼の啜り泣く声が鬼門の分厚い壁を伝つて、男の脊椎に流れていった。しかし、そのときの男は全くもつて無情であつた。老夫の悲泣を蔑むように、小さく唸っていた。二人の間には鬼門という一枚の壁と無限に続くかのような暗闇が居座っていた。

しばらく時間が経つて、男が口を開いた。

「おい、大丈夫か？　そういえば、あんたの名前聞いてなかったな。俺の名前は……。」

男が話題を変えようと、老夫の方を振り返ったその時、もう老夫はそこにいなかった。気づけばあの巨大な鬼門も初めからそこに無かったかのように、跡形もなく消え去っていたのである。

アマカゲラでは逆行列車を待つ人々で活気づいていた。普段と変わらずに老若男女問わず、あちらこちらで騒ぎ立てている。子供達が輪を作って踊っていた

り、若い女性は自由にフアツションを楽しんだり、森のベンチで読書に耽る青年やウミウニ山へ登山を楽しむ老夫婦、ガイコツビーチではしやぐカップルもいる。だがここでは、異様な光景も目の当たりにする。他人のことなどお構いなしに、裸で走り回る男女もいれば、大音量で、音楽を奏でる音楽隊、一日中、空を飛ばうと鳥の真似をする子供、懸命にしやがんで猫と会話をしようとする二人の女性、木材を集めたかと思えば、数十人体制でひたすら積み上げていこうとする青年達、積み上げられた木材に歓喜の声を上げる人々、このアマカゲラの住民は全くもって狂人という

他ない。彼らは同じ場所にいながら、それぞれが違う時間軸の中にでもいるのだろうか？そう疑いたくなるほどに、彼らにはまるで「世界」というものが見えていない。各々が取り憑かれたように奇妙な行動を取るばかりである。しかし、ここではあの男と老夫のように暗闇を彷徨うような者は見当たらない。皆が自由気ままに過ごしており、何より幸せそうである。その有り様はまるで天国にでも住む住民のように、目の前の何気ないことを純粹に楽しんでいるかのように思われた。そしてしばらく経って、立方時計の九本の秒針がゼロを差した。

遡行列車はこの世界で唯一の交通手段である。普段、川下から川上へ川道の上を走ってくる。白銀に輝くその列車というのは、白昼に現れる太陽の光のように、この世界をギラギラと照らし出す。この日、久しぶりにこのアマカゲラに遡行列車が現れた。川道が現れるとそこにいた人々は、川道へ向かって走り出した。そして、列車の姿を確認すると、人々は笑顔を浮かべて一斉に手を振り始める。そして、列車の光に魅せられて、見惚れている紳士的な男性もいる。また、ある少女は不思議そうに川道を眺めている。川の水は透き通っており、そこには映画のスクリーンの様に、

淡い映像が流れている。少女はその光景の美しさに瞳を光らせていた。列車の走る勢いで川の水が豪快に飛び散る様子は、冬の澄み渡った夜空を見るように幻想的であつた。列車は停車すると、その形態を大きく変化させ一気に巨大化した。ここにいるアマカゲラの住民は軽く収容できるくらいの大さきである。人々はその手に番号札を持っているものの、次から次に我先にと列車に飛び乗っていく。中には強引に扉を開ける者や、壁に穴をこじ開けようとする者もいた。列車の終点は、カイキとある。人々が勢いよく車内になだれ込む中、戸惑つた様子で裸の少年が一人、周囲の様子を

呆然と眺めていた。坊主頭に瘦身の体は泥にまみれていて、下半身に傷跡が残っている。人々は少年には気づく様子はなく、構わず列車に乗り込んでゆく。少年はそのアマカゲラの人々を見つめながら唇を噛み締めていた。そして、列車に乗る素振りを見せることもなく、いよいよその少年は乗車しなかつたのである。光に満ちている遡行列車の去る姿を真つ直ぐと見つめたまま、少年はしばらく立ち尽くしていた。少年はその後、近くの野原にトボトボ歩いていくと、ぱつと、倒れ込んで目を瞑った。アマカゲラの草木は、清らかな風に揺られ踊るようであった。少年は味わうようにア

マカゲラの空気をいっぱい吸い込んだ。その胸に沁みるように安らぎが伝わり満たされていく。瞳に映った景色がぼやけていくのを、少年はその熱い感触に理解した。アマカゲラの景色は依然として、夢のような美しさを保ち、名もなき少年を包み込んでいる。

「おかえりなさい。」
いきなり頭上から、どこか聞き覚えのある女性の声がした。その声はさざ波のように心地の良いものだった。

「ただいま、帰還しました。」

青年は目を瞑つたまま、口に任せて返答したが、すぐさま我にかえつて、飛び起きた。目の前には、一糸も纏わぬ中年くらいの女性がこちらを見下ろしていた。

「し、失礼しました。」

青年は、目を丸く、顔を赤くして、すぐにそっぽを向いた。女性は可笑しそうに笑いながら、

「あら、あなたには私がどのように見えているんでしょう。」

その言葉は動揺した少年の耳には全く入らなかつた。構わず女性は続けて、

「あなたはこちらへ来て日が浅いのですね。落ち着いてください。」

少年はキョロキョロ焦りながらも深呼吸をした。胸の動悸を落ちつかせ、改めて女性の方に目をやると、女性は藍色のワンピースを着て、赤い縁の眼鏡をかけていた。少年はその子の姿を見て、どこか懐かしさを感じるように見入っていた。

「キクちゃん：!?」

容姿も先ほどと打って変わり、少年と同一年くらいの少女になっていた。声色も先ほどより活発なものになっていく。

「ほらね。言っただでしょう。」

少女は嬉しそうに言った。少年が状況を飲み込めずに口をぽっかり開けていると、少女は仕方なさそうにため息をついて、

「ほら、自分の姿も確認して。」

「えっ、はい。」

少年が自身の体を確認すると、先ほどまで、ボロボロだった体は、傷跡もすっかり消えて、しつかりとした学生服を纏っていた。少年は何か気づいたのか、思い出したのか、これまでの緊張が解けて、肩の力が抜

けたようだった。少女は少年の肩をポンつと叩き、
につこり笑うと

「もうわかるでしょう。じゃあ、案内するね！」
少女はハキハキと楽しそうに言い、少年に向かって敬
礼をした。少年はその仕草が可笑しかったのか、それ
まで見せなかつた若々しい笑顔を浮かべて答えた。

「ありがとうございます。」

「そんなにかしこまらなくても良いのに……。あ！でも
でも、アマカゲラに残つても良いんだよ？きつとあな
たは独りだろうけど、ここに居たら会いたい人に会え
るかも？」

少女は思い出したように、からかうような口調で言った。少年は少し考えて、首を横に振った。

「いえ、大丈夫です。おそらくここにいてもみんなには会えないと思います。だから、あるべき場所を受け入れたいと思います。アマカゲラも素敵な場所ですが。」

少女は、嬉しそうにはにかんで、それ以上何も言わずに歩き出した。少年も少女の隣に並んで歩く。ただひたすら二人は歩く。ある時は街中を、ある時は森林を、ある時は水中を、ひたすら歩く。二人の表情は終始、穏やかであった。少年の瞳に映る景色はみるみる

うちに鮮やかに、より鮮明に、より力強くなつていった。次第に景色の輝きは増していき、あらゆる物が原形を留めなくなつていく。山が山でなくなり、海が海でなくなり、大地が大地でなくなり、人が人でなくなつた。キラキラと小さな光が踊るように集まり少年を包んでいく。最後に少年と少女が手を取り合つた時、一瞬、彼の視界に愛する人々の顔が浮かび上がった。彼は一切を了解し、全てに行き渡るほどの光を放つた後、少年の姿は、パツと消えてしまった。

少年が去つた後、アマカゲラには小さな燃えかすからの煙がしばらくの間、尾を引いていたのである。

受付の若娘はアマカゲラへ戻ってきた。初めての一人仕事を無事に終えて安心したのか、気持ちよさそうに帰ろうとする。しかし、何を思ったのか、川道へ向かい、彼女は静寂の中の透き通る水中を見下ろした。そうして受付の若娘は、走馬灯のように流れる美しい透明な映像の中を、じつと、どこを見るときもなく見つめていたのである。

